

分散会 1 3

司会者 河野 哲弥
記録者 門屋 浩
会場責任者 大森 茂樹

島根県浜田市

島根県浜田市立安城公民館主事の藤井礼子氏が、「弥栄での暮らしがイザ！という時の自主防災～つながってほしいな弥栄今昔物語全3巻～」について発表された。

約350世帯が生活する地域の現状から、防災における体制を早急に見直す必要性を地域課題と捉えた。衣食住の知恵など、弥栄が大切に守ってきたものを学ぶ活動を通して、住民それぞれに役割があることに気付かせ、各関係機関や行政と協働しながら自主防災の町を創造したいと考えた。そこで、「今昔、温故知新」をキーワードに、食をテーマにした弥栄今昔物語全3巻のストーリーを展開した。

第1巻は、「自主防災の意識を高める」で、小学校や中学校の食に関する授業展開に、防災の意識をもった公民館が関わる取組。第2巻は、「暮らしの知恵を防災に活かす」で、山の食材の加工など、暮らしの中で子育て世代と孫持ち世代の交流を意図的に行った取組。第3巻は、「結という助け合いの精神を活かす」で、プロジェクト会議等を通して関係機関の連携を深めた取組。

受け継がれてきた「結」という助け合いの精神、弥栄の暮らしそのものが防災であるという、老若男女誰もが参加できる公民館流の自主防災ができる町を地域に提案した。



藤井 礼子氏

愛媛県松山市

愛媛県松山市荏原公民館子育て支援グループの朝川真紀氏が、「地域子育て支援事業『みんなであそぼう！ぱんぱんパーン』」の発表をされた。

平成17年5月より、荏原公民館・久谷地区社会福祉協議会・久谷地域ボランティア・久谷地区民生委員の支援・協力のもと、月に1回程度、荏原公民館において活動を行っている。

小さい子どもからお年寄りまで、一緒に楽しむことができる「人の輪づくり」や障害者への理解や支援、交流を深めるため、小さい頃から健常児と障害児が、一緒に触れ合い、遊び、「お互いを理解し、尊重し合える心が育まれる場所づくり」等を目的にしている。内容は、体を動かし楽しく遊ぶ中で達成感や喜びを感じ育てるムーブメント教育指導、絵本の読み聞かせ、クリスマス会などのイベントである。保護者や地域の民生委員、ボランティアの方など、大人が世話をすることで、安心して安全に活動できるように配慮している。それは、人と人のつながりを深める交流の場となっている。子どもをはじめ参加する方が、周りの人へ感謝する気持ちをもてるように願っている。



朝川 真紀氏

愛媛県今治市

愛媛県今治市常磐公民館主事の青野信久氏が、「ふくしまキッズ」の活動を通して行った、こどもの絆プロジェクトに関する自然体験学習の実践を発表された。

これからの公民館はどうあるべきかという問いかけから、魅力ある活動の発信と大きく開かれた窓口を意識した。県内の公民館職員が地域と連携し、市を超えた職員同士の情報交換と互いの手法を学びながら次のステップに進む、「こども絆プロジェクト」

を行った。ふくしまキッズから学んだことは、幅広い人間関係の大切さ、楽しむことの大切さ、もちつもたれつの関係など、自然体験を通じた人間体験学習であり、結果として愛媛が好きな人が増えたことである。小学校4年生から高校3年生まで約1,100名を対象に、活動前、活動後、1か月後にアンケート調査を行った。その結果、自然体験活動を通して、生きる力と自尊感情に著しい変化が見られた。この活動を通して、公民館は、地域住民が住んでいる町を好きにすることができるのではないかと思います、必要とされる公民館を目指している。



青野 信久氏

分散会の内容

1 藤井 礼子氏の発表に対して

- ・ 第3巻は、計画的にまとまったものになるのか。
 - 普段から地域住民の声を集めるなど、公民館が中心になって取り組んでいる。
- ・ 働き盛りの人に対するサポートシステムはできているのか。
 - 雇用の場がないので、起業でもしないと難しい状況である。将来、弥栄の町に戻って来ることを期待して、小・中学校に働きかけたり、地域おこしをしたりしている。学校へは、浜田市のふるさと教育事業、学校支援地域本部事業、弥栄今昔物語の事業説明をし、協力を得た。弥栄のよさを知っていただくよう努力している。
- ・ 東京から地元松山市に帰省してきたが、自然を大切にしながら生活することの大切さを日々実感している。隣人同士で声を掛け合い、不測の事態が生じても助け合うことができる。先人の知恵を生かし、人とのつながりを深めるすばらしい実践だと思った。
- ・ 徳島県では、防災と生涯学習というテーマで社会教育の報告書を出している。防災は、必ず地域の方が関心をもってくれるので、そこから生涯学習を進めていこうとした。放課後子ども教室の子どもたちは、防災キャンプに参加して防災を学んだ。防災は、誰もが関心をもち、地域の方を巻き込みやすいツールの一つかなと思っている。
- ・ 保存は大切なことだが、水などに浸かったらどうなるのか、山間部で土砂崩れが起きたらどうなるのかなど、ちょっと心配になった。
 - 高齢化は進んでいるが、高齢者は食の保存の知恵をもっている。田や畑が荒れる、有害鳥獣の被害など地域課題は多くあるが、行政機関や各団体、住民が地域に関心をもつきっかけを「防災」とし、この町で暮らしてきてよかったと思える豊かな田舎を誰もが参加できる食を通して「おいしいむら弥栄」として地域へ提案した。例えば「福祉にとっておいしい取組はなんだろうか」と、いろいろな角度から考える機会になった。
- ・ 「おいしい」というのがいい。東京で、女性が女性を支援する基金の創設の発表会があった。人が集まらないという悩みを話し合った時、「おいしい、楽しい、新しい」の三つがそろっていると、若い人や女性が集まるという話がでた。私も、「おいしい」を取り入れた活動を計画したい。
- ・ 中学生が総合的な学習の時間で課題を解決する提案をした中で、実現した事例はあるか。
 - お祭りなどのイベントに参加したり、大人のブースの手伝いをしたりした。イノシシの駆除はできないけれど、イノシシベーコンを開発する取組をした。商品化はされなかったが、子どもの斬新なアイデアをもとにキャッチボールができ始めている。自転車による発電機づくりやペットボトルによる水の濾過など、中学生も避難した時に役割があることを実感する機会になっている。
- ・ 地元大洲などは、過疎化が激しく、人がどんどん減っている。自主防災の活動を通して、ピンチをチャンスに変えているのがとても参考になった。

2 朝川 真紀氏の発表に対して

- ・ 参加者の募集はどうするのか。
 - 公民館の主事にチラシを作ってもらい、公民館から配布したり、読み聞かせボランティアの時に配布したりした。毎回集まる人数は異なり、イベントなどには人がたくさん集まる。
- ・ 金銭面はどうなっているのか。
 - 以前は参加料を取っていたが、現在は無料である。社会福祉協議会や公民館の予算から補助をいただいている。
- ・ 交流している障害児の様子について教えてほしい。
 - 知的な障害がある児童は、場に慣れるのに時間がかかる。デイサービスの方との協力体制が十分とれていない。地元の特別支援学級の子どもたちが集まり、だんだん健常児とのつながりの場になっている。思い切り羽を伸ばして遊ぶという機会や場として適している



ムーブメント活動の体験

と思う。長く続けたいが、若い世代の後継者が見付きにくい。ボランティアとして、大学生のサークル、人をケアする仕事に興味がある人などを巻き込みたい。

- ・ 「尾道 100 km 徒歩の旅」というイベントで、4泊5日で尾道市内を子どもたちと歩く活動に参加したが、とても楽しかった。募集をかけると学生は集まると思う。介護実習でレクリエーションを行う機会があったが、方法が分からず困った。今日のような体験をしたかった。
- ・ 大学に働きかければ、子どもと一緒に遊べるよい機会になるので、学生は集まってくるのではないかと思う。
- ・ 埼玉県のみじみ野市では、大学に自分たちがポスターを持って行き、多くの女子大生を集めている。そして、一人暮らしのお年寄りに食事などを持って行くなどしている。直接大学に働きかける、こちらから営業に行けばよい。関心を示す学生は多くいると思う。
- ・ 徳島にもサークルがある。発表の中には、父親の姿があまり見られなかったが、実情はどうか。徳島では、お父さんだけ集めて夜間に学ぶ機会がある。
→ お父さんは少し参加するが、見ている方が多い。積極的にバルーンに入ってくれる方もいる。お父さんの意識を変えたい。小学校の行事ではお父さんの参加が多く見られる。

3 青野 信久氏の発表に対して

- ・ 中学生・高校生・大学生など、若者の地域参画の工夫、特に県内ばかりでなく県外の大学生を活動に引き込む仕掛けなどがあれば教えてほしい。
→ 誰もが自分を認めてほしいと思っている。自分の存在価値が高まったら、自分を認められた感が高められる。学生リーダーが決まった時点で、全てをリーダーに任せるようにしている。学生たちが立案した内容がおもしろかったら実行させるが、そうでない時はすぐやめさせる。スタッフと学生たちとの戦いだと思っている。例年通りのプログラムをもってきても許可しない。すると、知恵をしばって新たなプログラムをもってくる。活動が終わった時に、学生たちがやり切った満足感が得られると思っている。次につながるよう、学生が進めてほしいと願っている。
- ・ 一番最初に学生たちを引っ張ってくる手だてはどのようにしたのか。
→ タイミングだと思う。震災が起こった時、何かしたいと思う人はいっぱいいた。学校生協に張り紙をしたら、学生ボランティアが集まった。最初のプログラムはだめで、学生に迷惑をかけた。下の学年を連れて来てもらうお願いをした。学生の中には、ボランティアをお願いするボランティアもおり、いろいろな人に参加してもらった。
- ・ 公民館の重要な役割は、人づくりや町づくりである。人を呼び込むのはすごいと思うが、「ふくしま」のプログラムはツールである。公民館の本来の役割である、地域をどうつくっていくのかというところが少し見えなかったので、地域の子どもたちはどうなっているのか、知りたい。
→ 新聞に報道され、公民館の意味や存在を知ってもらった。普段使えていなかったツールが使えるようになった。付き合いが途切れていた漁協にお願いして、地元の子どもたちに地引き網を引かせてほしいなどのお願いをした。地元のPTAが、子どもたちのために何かできることをしようという団体ができて、一日限定の光のイベントなどを実施した。間接的に地域の活動に広がったと思っている。

4 その他

- ・ 四国で初めてユネスコスクールに認定された、新居浜南高等学校のユネスコ部に所属している。別子銅山の残した近代化産業遺産の調査・研究を行い、学んだことを地域に発信している。ユネスコスクールに認定された小・中学生を対象に出前講座を行って、地元を誇りに思ってもらうなど、地域の活性化に取り組んでいる。活動を通して、多くの人と出会い、人の優しさ、温かさを体験することができた。卒業生には、地元へ帰省して仕事をする人がいる。
- ・ 「尾道 100 km 徒歩の旅」がメインの活動であるが、本来は人間力育成塾で年間を通して活動をしている。発足は、生きる力を子どもたちに育むのがねらいであった。学生の成長もねらいに込められた。その研修の一環で、今回の研修に参加した。